

P1-042

いじめの経験が大学生の自我の発達に及ぼす影響

林田 リカ

長崎県立大学シーボルト校 看護栄養学部 看護学科

【目的】教育現場でのいじめに関する事例は多く存在し、児童の死亡事故は相次いでいる。先行研究では、過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響について実施されており、いじめの体験がその後の発達に関係していることが示唆されている。そこで、本研究では幼児期・学童期に受けたいじめが、青年期までの自我の発達にどのような影響を及ぼすのか明らかにし、教育や医療現場で援助を行う上での一資料とすることを目的とした。

【研究方法】N 大学に在学中の 1～4 年生 236 名を対象に、対象者の属性、いじめについての認識、過去のいじめ経験の有無、青年期の自我発達上の危機状態尺度など調査票を用いて行った。調査期間は 2015 年 8 月。調査方法は、講義終了後に研究の目的と倫理的配慮について説明した後、調査票を配布し、記入後にその場で回収した。倫理的配慮として回答は無記名自記式とし、研究の目的・方法、調査への参加は自由意思であり回答や内容によって不利益を被らないこと、データは研究以外には使用せず研究終了後には処分することなどを口頭および書面に説明した。

【結果および考察】有効回答数は 218 名（有効回答率 93.2%）であった。いじめについて「考えたことがある」と回答した者は 95.4% であり、いじめと考える内容は「仲間外れにされる」45.9%、「暴力を受ける」44.5%、「無視される」41.3%であった。全体の 22.5% がいじめを受けた経験があり、時期は「小学生」65.3%、「中学生」36.7%、「高校生」6.1% の順で多かった。いじめの内容は「仲間外れにされた」67.3%、「無視された」53.1%、「暴言を言われた」14.3% であった。いじめを受けた経験と相談者との関係では、経験のあるほうが相談者のいる割合が高く（ $p < 0.001$ ）、相談相手は「母親」59.2%、「友人」32.7%、「担任の先生」16.3% の順で多かった。いじめの経験と自我発達上の危機状態尺度との関連では、適応的危機内容（B 水準）においていじめを受けた経験のあるほうがない者より適応的危機状態が高いことが分かった（ $p < 0.05$ ）。先行研究において、小学校および中学校時期のいじめ体験により“同調傾向、対人評価への過敏”などが起こると示されている。いじめの経験が自我の発達や人との関わり方などに影響を及ぼすことが示唆された。今後は、教育や医療現場での異常の早期発見、カウンセリングなどにつなげる必要があると考えらる。

P1-043

養護教諭養成課程学生の学校救急処置における臨床判断能力の準備状況（第三報）

山田 玲子¹⁾、岡田 忠雄¹⁾、葛西 敦子²⁾、福田 博美³⁾、佐藤 伸子⁴⁾北海道教育大学札幌校 教育学部 医科学看護学研究室¹⁾、弘前大学²⁾、愛知教育大学³⁾、熊本大学⁴⁾

【背景と目的】近年、学校における疾病や事故への救急処置は、児童生徒の生命や安全を守るためにますます重要となっている。保健室は救急処置を担う場所であり、そこで養護教諭は児童生徒の傷病に対して、フィジカルアセスメント等に基づいた臨床判断を行い、適切な処置対応につなげている。一方で、学校救急場面では、バイタルサイン観察をすることが異常の早期発見につながり、適切な臨床判断を行う方法として重要であるが、その数値や観察内容を的確に判断して対応する際の困難さが指摘されている。そこで本研究では、養護教諭を目指している学生を対象にアンケート調査を行い、フィジカルアセスメントに関する学生の臨床判断能力の準備状況を把握することを目的とした。第一報、第二報に続いて今回の第三報では、学生の自由記述の分析結果に基づいて、大学において実践的な授業を行うことで、具体的にはどのような準備や心構えができたのかを明らかにしたので報告する。

【方法】2 大学の養護教諭養成課程の 3 年次学生計 46 人（A 大学 26 人、B 大学 20 人）を対象に、『「食物アレルギー」のある子どものフィジカルアセスメントとその対応』と題した講義と事例を用いた演習および実習を行った。その授業等の後に記入を求めた臨床判断に関する感想等自由記述を、計量的テキスト分析ソフト「KH Coder (Ver.3Alpha.17)」へ入力し、単純集計後に頻出語分析および共起ネットワーク分析を行った。

【結果と考察】フィジカルアセスメントに関する授業の感想等の自由記述を単純集計したところ、110 文、44 段落、総抽出語数 3,460 語であった。頻出語のうち上位 10 語は、「バイタルサイン」「実際」「自分」「測定」「音」「行う」「演習」「学ぶ」「養護教諭」「ロールプレイ」であり、実際に演習を行うことがバイタルサインと聴診に関する学びにつながったことが推察された。共起ネットワーク分析では、7 つのグループが構成された。そのうちの 1 グループでは、「呼吸」「腸」と「音」そして「観察」「脈拍」「血圧」の 6 語が共起しており、呼吸音や腸音の観察と循環動態を判断するためのバイタルサイン観察が印象に残り、卒前段階で学校救急処置における臨床判断の構成要素としていたことが考察された。

本研究は JSPS 科研費 17K04835 および 17K12564 の助成を得て実施された。